音韻（史的研究）

湯沢質幸

〇、はじめに

学会展望のあり方についての意見交換はこれまでにもしばしばなされてきた。しかし、なお結論らしいものは出ていないし、また出すべきではないのかもしれない。本欄担当者自身、展望に対するしっかりした考えを持ちあわせているわけでないが、さしあたっては、これを、当該期間の発表論文の概要紹介を行いつつ論文および研究動向につき感想を若干加えたもの、と位置づけることとしておきたい。

なお、本欄では余りにも感想文的な「論文」はとりあげなかった。また、「文字・表記」をはじめ他欄と深くかかわる論文の場合、私にとりあげるか否かを決めた。ただし、本欄担当者の不注意で結果的にとりあげなかった論文も多々あろうかと思う。これに関してはただただ御容赦願うのみである。また、次の論文集は以下のように略称する。『論集日本文学・日本語』（角川書店）→『論集』・『春日和男教授退官記念語文論叢』（桜楓社）→『春日論叢』・『中田祝夫博士功績記念国語学論集』（勉誠社）→『中田論集』・『川瀬博士古稀記念国語国文学論文集』（雄松堂）→『川瀬論文集』

一、上代語を中心として

昭和五一・五二年においてジャーナリズムにもとりあげられ大きな話題を呼んだ上代母音組織をめぐる論争は、今期は一時休止の状態にあるように見える。すなわち論争に参与する論文は、従来国語学方面で主張されている八母音肯定説の①西宮一民「『上代特殊仮名遣』論――上代日本語音韻論(一)――」（『皇学館論叢』11―5、昭53・10）だけであり、前回本欄担当の高松政雄のいう「いわば言語学攻勢」もなく、論争にこれといった進展がなかった。とはいえ、またいずれ再燃するであろうが、すでに指摘されているように音韻という語の概念についてすら、また湯沢の印象では音韻（史）研究の基盤ないしは基本的立場においても、論者間に共通理解が必ずしもないまま論争が続けられてもさほどみのりがあるとは思われない。一度このような基盤にもたち入ったシンポジウムなど催されたらいかがであろうか。

上代特殊かなづかいの崩壊・残存に関する論は今期も少なくない。まず「コ」を問題にしたものが二つある。②西原一幸「『新撰字鏡』のコの仮名と『尾張国熱田太神宮縁起』」（『国文論稿』6、

昭53・3）は、標題後掲書の検討から『新撰字鏡』における「コ」の甲乙書き分けは作者昌住自身によるとする。③相磯裕「承暦三年本『金光明最勝王経音義』の『古』と『己』」（『国語国文』48―9、昭54・9）は、承暦本では「コ」の甲乙は区別されており、それはこの書の「筆写者の発音にコの甲乙の区別」があったからであるとする。両論ともに緻密で論旨はそれなりに理解できる。とりわけ③は、十一世紀にも「コ」の甲乙が残存していたことを示す点において興味を引く。ただし、そこで利用されている観智院本『類聚名義抄』のアクセント資料としての性格・価値を考えてみると、なお、「古・己」の使い分けの基本はアクセントの別にある可能性も残されているように思われる。

一方、④犬飼隆「上代特殊仮名遣の崩壊過程と古事記のオ・シ・ホのかな」（『国語国文』47―9、昭53・9）は、歌謡の相違、歌謡と地の文の相違等と仮名の使い方との関係の分析から「オ・シ・ホ」の仮名の用法と音韻（変化）との関係に注意深く迫ろうとするもの。また、⑤馬淵和夫「『日本霊異記』とその訓釈のかな」（『春日論叢』、昭53・11）は『霊異記』諸本の資料価値を論じつつ特殊かなづかいの崩壊残存を追究し、あわせてこの書には「アクセントかなづかいのない」ことを述べる。この二論の結論はおおむね妥当といえよう。なお⑤と類似の問題を扱うものに⑥池田政美「『日本霊異記』における上代特殊仮名遣について」（『大谷女子大国文』9、昭54・3）がある。

さて、音節構造論に転じてみると、⑦遠藤邦基「古代東国語の音節構造――中央語との比較から――」（『叙説』、昭53・4）は∧上代中央語＝シラビーム↕東国語＝モーラ∨を、⑧桜井茂治『日本語の旋律』（双文社出版、昭53・5）は音節構造論が主体でないが、旋律とのかかわりにおいて、シラビーム構造であった中央語は中世を過渡期としてモーラ構造に変ったと述べる。両論ともに魅力的であり論旨もよくわかる。しかし、論拠とする字余り、地名表記（⑦）、差声や音便（⑧）等の証拠能力なり解釈なりに対しては、率直なところ即座には同意しがたい点がある。たとえば、⑧における「タカイチ→タケチ高市」の例の場合、まず上代「当時の日本語の音節構造が、中略シラビーム的性格をもっていたという前提」に立ってこれを解釈し、ついでこれを「当時の日本語の音節がシラビーム構造に近かったこと」34ぺの一証左としているが、ここに見られるのは一種の循環論であり、このままではこの（ような）例は上代語シラビーム構造説のささえにはならないのでないか。ともあれ、⑦⑧には互いに関連するところもあり、今後における議論の深化を望みたい。

万葉仮名使用には朝鮮におけるそれに似た用法の影響があるという考えは、今日ではすでに定着しているといえるであろう。この分野の研究に以前から取組んでいる藤井茂利には、⑨「推古朝時代のオ列音表記の音仮名――朝鮮漢字音の受容に関して――」（『薩摩路』22、昭53・3）、⑩「推古朝時代のウ列音の仮名」（『鹿児島大学文学部文学科論集』13、昭53・3）、⑪「推古時代の音仮名と朝鮮漢字音――ア列音表記の漢字を中心に――」（『春日論叢』、昭53・11）等一連の論文がある。いずれもいわゆる借音仮名の由来や系統を朝鮮古資料から考察する。しかし、わずかな用例にしたがう万葉仮名の系統分類にどの程度の意義があるのだろうか。また、たとえば河野六郎『朝鮮漢字音の研究』によると異なる解釈の生じるところなどもあるようである。なお、音韻専書ではないが、この方面の研究の手引きともな

る、⑫金思燁『記紀万葉の朝鮮語』（六興出版、昭54・8）が出された。

今期において特筆すべきことの一つは、語学畑以外の人の手になる書が二つ出版されたことである。⑬大塚毅『万葉仮名音韻字典』上下（勉誠社、昭53・4）、⑭堀田勝郎『万葉仮名甲乙の再考』および『同補追記』（市民出版、昭54・2と同・8）。前者は上下計二三〇〇ページの大著。残念ながら⑬⑭の両書とも、参照論文のいちぢるしい片よりと先行論文の未消化とが目だつ。ただし⑬は上代語研究史を知る上での一助ともあるいはなりえよう。ついでのことながら、「文字・表記」欄でもとりあげられるであろうが、⑮江湖山恒明『上代特殊仮名遣研究史』（明治書院、昭53・1）が出版されたことを紹介しておく。

そのほか、⑯かめいたかし「文字をめぐる思弁から〝龍麿かなづかい〟のゆくえを追う」（『成城文芸』85、昭53・3）や「音韻体系の『すきま』」を論じた、⑰久島茂「上代語における吸着音について――シェャソ」（『国語学研究と資料』3、昭53・6）などがある。⑯は、「文字・表記」欄でくわしく触れられようが一読すべき論文。その内容は要約を容易に許さないほど含蓄と示唆に富む。

ところで、本欄ではその上限を一往六世紀ごろに定めたが、日本語系統論を見ると、著書だけでも十五前後あり、まさに今期は〝花ざかり〟の様相を呈している。多かれ少なかれ音韻にかかわる系統論の、その逐一の紹介は省略にしたがい、音韻史という観点から私に興を引かれたものをいくつか掲げおくにとどめたい。⑱池上二良等『日本語の系統と歴史』（岩波書店△『岩波講座日本語』12▽、昭53・1）、⑲村山七郎『日本語系統の探究』（大修館書店、昭53・5）、⑳小沢重男『モンゴル語と日本語』（弘文堂、昭53・6）、㉑安本美典・本多正久『日本語の誕生』（大修館書店、昭53・11）、㉒川本崇雄『南から来た日本語』（三省堂、昭53・11）、㉓服部四郎「日本祖語について(1)～(22)」（『言語』7―1～3、6～12および、8―1～12、昭53・1～3、6～12および昭54・1～12）、㉔同「アルタイ諸言語・朝鮮語・日本語の母音調和」（同7―4、昭53・4）。それぞれ問題への接近の仕方に特色があり、また、⑱⑲㉓などは系統論について啓蒙的な性格をもつ。なお、⑲では「日本語動詞ステムおよび活用の起源」に一章をあてているが、今後の話題となろう。

二、中古以降を中心として

ここでは、その主たる対象が中古以降近世以前の和語の音韻をとり扱う研究の展開を見る。

最初に従来も比較的盛んな清濁に関する研究から見ていくこととすると、まず、古代中国から現代日本に至るまでの清濁の観念ないしは内容の歴史的研究である、㉕佐藤喜代治「日本語における清濁の起源」（『言語』8―1、昭54・1）が目を引く。広い視野に立つ全体の概観で、教えられるところが多い。なお細部については他のこの関係の論文とのつきあわせが必要とされよう。次に時代・資料等における個別論では、㉖木田章義「濁音史摘要」（『論集Ⅰ　上代』、昭53・3）がある。これは、もともと「清音節に『にごり』というプロソデムの加わったものと認識されていた」濁音は「P→Φの音韻変化を契機として、まずバ行音の音韻としての独立の必要を生じそれが濁音の日本語内部での機能負担量の増加の潮流にのって、濁音全体が音韻としての位置を得ようとし始めた。その独立への過程が濁音の前の強い鼻音であったのではないか」という。木田にはこ

の論に基づいた、㉗「連濁とアクセント」（『国語国文』48―3、昭54・3）もあるが、こと㉖で重視されている「認識・意識」と音韻（体系・変化）との関係がもう一つ判然としない。また、濁音が古くはプロソディのレベルにあったのか否かはともかくとしても、バ行音の「独立」がガザダ行音に先行し、院政期あたり濁音すべてが鼻音性を持っているわけではなかったと述べている点などなお証明十分とは思えない。しかしながら、直接関係はなさそうに見える事象を有機的に結びつけ、それを合理的に説明しようとする木田の姿勢は大切にされるべきであろう。ところで、㉗は『類聚名義抄』を用いて複合語アクセント・連濁・濁音間の関係やそれらの機能を見る。これと同じ資料を用い類似の問題にも触れた、㉘木部暢子「形態アクセント論的一考察――複合語アクセントと語構成・連濁をめぐって――」（『語文研究』46、昭53・12）は共時論的に細かく複合語を分析する。一定の結論を得るにはなお時間がかかりそうである。他資料との比較や史的な観点からの検討を加えてみたらいかがであろうか。

右の二論でも扱われる連濁に関しては、㉙中川芳雄「連濁涵精（上・下）」（『国語国文』47―2・3、昭53・2・3）は読みごたえのある論文である。中川はすでに「連濁・連清（仮称）の系譜」（『国語国文』35―6）を公にしているが、それをさらに発展させる。「濁音化の契機に相違がある」との考えのもと、連濁を「やまとことば系連濁」と「漢語系の連声による連濁」（いわゆる新濁）とに分け、最初に「いはば連濁研究史」をロドリゲス・ライマン・山田孝雄などの連濁「一括追求方式」を批判しつつ述べ、ついで両連濁の「具体微妙の差」を見る「小雨（コサメ）・博士（バカセ）」などの各論に入る。「連声系の連濁」の「ニゴリは音声上の自然」等という記述には少々とまどいを覚えざるをえないものの、こと各論においては、精緻な資料考証、すなわち多くの徴証につき逐一その解釈の可能性を追究し、蓋然性の高い解釈を採用するという態度が貫ぬかれているので、無理なく趣旨が理解される。その態度には見習うべき点が多い。

そのほか清濁に関しては、㉚野口義広「清濁資料としての近松世話物浄瑠璃」（『語文研究』44・45、昭53・6）、㉛高野平「新撰万葉集を中心に係助詞『ソ』の清濁について」（『語文』45、昭53・9）、㉜上野和昭「国語におけるマ行音バ行音交替現象について」（『国文学研究』66、昭53・10）がある。㉜は、古くて新しいこの問題を解くための調査に努力のあとがうかがわれる。いずれ「MB交替の全体的傾向」の把握がなされることを期待したい。

さて、㉝遠藤邦基「中世末期のパ行音――その成立の背景――」（『論集3　中世』、昭53・6）は、半濁音Pの音韻論的「復活」では「ハ行頭子音が唇音性を失ったことはたしかに（中略）必要条件ではあったが、それだけでは十分条件とはなり難く、あくまでもバ行頭子音の鼻音性の喪失が重要な条件と」なっていたと述べる。清濁の対立につきp対bの音声的対応関係を重視する立場からすれば、この見方は筋が通っている。この論中においての、音韻と音声とに関してはよく理解できない点があるのであるが、「復活」以前にはハ行Φ対バ行mbという単に唇音性だけの共通する対応関係があるとする（遠藤の）見解によるところ、理屈の上では、唇音性さらに破裂性という面でも共通するp対mbという対応関係成立の可能性、そしてこの関係成立後pの影響のもとでmb＞bという変化が起ったという可能性も一往考えられそうである。このような考えを退けるには、単にpの「音韻論的に成立する時期」とmb＞bの「鼻音脱落期とが

ほぼ一致している」ことを指摘するだけでは不十分なのではなかろうか。その他音変化の時期の認定についても議論の余地がある。遠藤にはまたこの㉜にもかかわる、㉞「連声発生の要因」（『叙説』、昭53・4）がある。これは中古末から中世はじめにおける漢字音研究、アクセント・音節構造の変化に連声発生の因を求めるもの。掲げる徴証の処理や「要因」には異説も出ようし、もっと証左の欲しい個所もある。ともあれ、先の⑦㉝も含め遠藤の着想にはユニークな点がある。そのほか連声に関しては、『日葡辞書』のそれなどについて述べた、㉟松本宙「連声考拾遺」（『国語国文』（宮城教育大学）10、昭54・6）がある。

なお、先に紹介した、⑧『日本語の旋律』は、音節構造・アクセント・話調などとの関連において旋律を検討するもので、その具体的考察は清濁・音便・連声その他へも及ぶ。

以上、清濁に多少なりともかかわる研究を中心に見てきた。総じてみると、この方面の今後の研究方向に多大な影響を与えるような論文はなかったものの、それなりに個性的な論文が目立った。ただし、各論文の発表時期が近いということもあってか、論文間にはたとえば濁音の音韻論的位置づけなどにおいて部分的にもせよ重なり合うところがあっても意見交換は皆無に近かった。論の発展次第では将来交錯するところの出てくることも予想されるので、今後における活発な議論を期待したい。

ところでアクセント研究には、㊱奥村三雄「平曲譜本に反映した自立語のアクセント」（『春日論叢』、昭53・11）、㊲同「平曲の詞章と旋律」（『文学研究』76、昭54・3）、㊳秋永一枝「古今集声点本における『名』のアクセント」（『国文学研究』67、昭54・3）もある。㊱は自立語を品詞別・拍数別・アクセント別に分類整理したもので、㊲は「詞章と音楽的旋律との間には極めて密接な相関性が認められる」という立場のもと、「テキストによる本文詞章の変化は音楽的旋律との関係が深い」ことを検討する。平曲における奥村の業績が一冊にまとめられる日を待ちたい。㊳は姓名の「名」のアクセントを多方面から分析考察するもの。また、古典に出てくる「坂東声」をアクセントと（も）関係づける、㊴川上蓁「坂東声」（『音声学会会報』159、昭53・12）や謡曲譜本の資料的検討をなす、㊵添田建治郎「謡曲譜本のある種の施譜法――日本古典全集『帝室御物謡曲百番』にみる――㈠㈡㈢」（㈠―『山口国文』創刊号、昭53・3、㈡―『春日論叢』、昭53・11、㈢―『文学会誌』（山口大学）、昭53・11）もある。

次に音便研究に移る。全般的にみて中近世の音便を扱ったものに着実な進展が見られる。

通史的な研究としては、㊶岸田武夫「母音の消滅する促音化の現象について」（『川瀬論文集』、昭54・12）がある。これは、中古から近世に至るまでの促音化している音節とその前後の音節の「母音間の連音関係」をまとめて図示する。このような、いわば時代をこえた「関係」が時代別・資料別の促音便とどのようにかかわるのか、またそれをいかように説明できるのか、このあたりを知りたい。時代別研究としては、中古に『三宝絵詞』東大寺切を主資料とする春日和男の一連の研究がある。㊷「『東大寺切』に見える音便現象について」（『春日論叢』、昭53・11）、㊸「『東大寺切』書き入れ小見――撥音便とウ音便――」（『訓点語と訓点資料』62、昭54・3）、㊹「撥音便と撥韻尾――主としてmとnとの表記に関して――」（『文学研究』76、昭54・3）。これらは、東大寺切における音便現象の時代的位相的

特色、漢字音韻尾ｍｎと音便との関係などを論じるもので、音便研究ではないが、㊺「せんふくの花――m韻尾表記上の問題――」（『山口国文』2、昭54・2）も含めて互いに関係しあう。㊹の結論の一部として「多少とも音便現象の影響を漢字音が蒙ったという逆の方向も度外視してはならない」と述べる。これをこのまま受け入れるには不安を感ぜざるをえないが、脳裏にとどめておきたいと思う。㊻甲斐睦朗「青表紙本源氏物語における形容詞連用形のウ音便について――その表現への志向――」（『国語国文』47―8、昭53・8）は、青表紙諸本において「ウ音便形をとることの意味」を考える。随所に不可解な記述があるため、説得力不十分の印象を受ける。たとえば、諸写本におけるウ音便形出現の有無には「筆写者のウ音便形に対する意識」が反映されているとし、「その意識とは、中略大きく捉えると、ウ音便形をよしと容認するか、言葉の訛りだとして排斥するかの判断であり」というが、「言葉の訛り……」の部分なぞは論中の分析を参照しても理解に苦しむ。中近世では、㊼高見三郎「『杜詩続翠抄』の音便形」（『論集3　中世』、昭53・6）、㊽辰野弘由紀「『玉塵抄』におけるバ・マ四段の音便形について」（『人文論叢』八二松学舎大学V14、昭53・10）、㊾松井利彦「ハ行四段動詞の音便――近世漢文訓読における――」（『論集4　近世近代』、昭53・7）、㊿蜂谷清人「室町末ハ行四段動詞連用形の音便――狂言・説経・幸若舞を中心に――」（『国語学研究』18、昭53・12）がある。(51)は標題書の音便形を種々の観点から分析考察するもの。(48)は、浜田敦・前田勇・大塚光信によりその解決の基盤が築かれた問題につき、『玉塵抄』を用いてその細部のつめを行うもの。資料の限界もわきまえられており論旨は納得できる。辰野も言及するように、この方面の研究はすでに講者・聞書者などにおける個人差、また書写者間・資料間における相違を問題にすべき段階に入っているといえよう。(49)(50)は促音便・ウ音便出現の個々の具体相をとらえようとするもの。いずれも地道で手がたい。このような論文のつみ重ねにより、いずれ両音便形出現上の全体像が浮びあがってくるはずである。

さて、そのほかの問題をとり扱った論文もいくつかある。まず、(51)北原保雄「形容詞の語音構造」（『中田論集』、昭54・2）が目に入る。これは、形容詞の音構造上における特色の解明を形態音韻論的また史的観点から行う。他の品詞の場合における検討にも参考となろう。(52)鈴木博「日本書紀抄のハ行音記述――永正のなぞだて『母には二たび』の解きへの支証――」（『国語国文』47―9、昭53・9）は、副題中に示される、例の「なぞ」は、ほぼ同時期成立の抄物の記事によって（も）解けるという。抄物の記事を音韻史研究に用いた点が興味を引く。このハ行子音につき、その史的変化を論じた研究を収集整理し解説を加えた(53)福島邦道「ハ行子音――史的音韻論序説――」（『実践国文学』13、昭53・3）は、ハ行子音研究において有益なものである。福島には他に、その資料的価値やそれからうかがわれる音韻史の一側面を述べた、(54)「音韻史料としての全浙兵制考――日本風土記――」（『田辺博士古稀記念国語助詞助動詞論叢』桜楓社昭54・8）がある。(55)出雲朝子「玉塵抄におけるいわゆるウ列音とオ列音との交替現象について――和語の場合――」（『川瀬論文集』、昭54・12）は、アナヅルーアナドルなどの事例につき、その語形の現れ方や新旧などを詳細に考察する。『玉塵抄』研究に近年意欲的な出雲の成果の一つ。その他、(56)宮田裕行「院政時代の国語音について」（『私学研修』77、昭53・3）や、(57)春日正三「日蓮聖人ご遺文の国語学的研究――音声言語資料としてのトン・ド

ン——」（『立正大学文学科論叢』63、昭54・2）などもある。

ところで、音韻研究を必ずしも主目的としているわけではないが、音韻史研究にかかわりかつそれに益する論文を二、三紹介したい。まず、単行本としては、㊽小松英雄『いろはうた——日本語史へのいざない——』（中央公論社〈中公新書558〉、昭54・11）がある。これは、いろは歌・かなづかいなどに関する小松のこれまでの研究を一つの筋道のもとにまとめ、また、新しい研究領域を開拓する。着眼点と論証の過程に注目したい。論文としては、朝鮮資料を扱った、安田章の、㊾「『方言集釈』の日本語表記」（『国語国文』48—1、昭54・1）が目を引く。綿密な考証にもとづく堅実な論文である。

三、漢字音を中心として

漢字音韻研究は、ここ数年来発表論文も多くしかもその進展の度合も比較的高いといわれている。今期においても論文数は多く、少なくともその限りにあってはやはり盛んであるといえる。

五三・五四年を通じて、この方面のきわだった動向は、沼本克明提出の呉音（平去入）三声説に立脚した、ないしはそれを補強する一つづきの研究がおし進められたことである。以下、注目すべきこの呉音声調関係から見ていくこととするが、まずは、呉音声調の体系的把握開始に関する二つの論文の紹介から始めたい。

㊿馬淵和夫「呉音の四声説」（『川瀬論文集』、昭54・12）は、日本漢字音でいう「呉音の四声説というものは漢音の四声説からうまれてきたものではないか」ということを金田一春彦（「日本四声古義」『国語アクセント論叢』所収）の説などを引きつつ述べる。論点は、呉音・和音・対馬音の源流にも及び、古文献の記事が駆使される。一方、これとはまったく別に、(61)沼本克明「呉音系字音の祖系音について——声調体系からの接近の試み——」（『国語国文』47—7、昭53・7）もほぼ同様の結論を得ている。ただし、その証左とする古文献の記述の解釈には若干強引ないしは説明不足の個所があるため、説得力やや不十分と感ぜざるをえない。たとえば、『法華経釈文』の「対馬都司馬音　平声ノ字ハ都司馬音渡上去音……」につき、「初めに『対馬音』と出しながら、それに続く記述内容が漢音の側から呉音（対馬音）を把えている事——すなわち主語が呉音の平声字（中略）でなく、漢音のそれである事——は、正に、漢音によって呉音が把えられたという背景を物語っている」と解釈している。しかし、この記事には、たとえば「対馬音との関係を見るに本書『法華経釈文』（正音）で平声である字は、対馬音では上去音に渡る、ということだけを述べているにすぎない」という解釈も一往成立しそうである。すなわち、よしんば結果的にはAなる解釈が正しいとしても、一たびは他の、成立可能性のありそうなB・Cの解釈をも検討してみる必要があるのではないだろうか。

ところで、(61)の最終目的は、呉音三声説に立ち「呉音の声調体系を通して、その祖系音が六朝期の支那方言と緊密に結びついている」ことの推定にある。この結論自体はある程度予想されているものであるが、そのとり扱いのむずかしい声調の面から呉音の源に迫った点が意欲的でかつ新しい。ただし、ここでも論の進行上納得しにくい個所がある。たとえば段玉裁説を「通説」とする根拠、先行説の十分な検討をすることなしに「切韻音（＝漢音）」とし、『切韻』の調値を「平……一・上……ノ・去……ノ・入……」と認定していることなどについては、(61)が「試案」であるにしても、なおかつとまどいを覚え

ざるをえない。さて㊷高松政雄「呉音の声点」（『国語国文』48―11、昭54・11）も三声説からの呉音系統論で、「韻書と異音形」で「同声点の呉音の出現に焦点をすえ、その事由を中国音との関連において解こうとするもの。『経典釈文』の音注の処理などに問題が残されそうであるが、現段階における研究の限界もわきまえられているので、それなりに論旨は理解できる。なお、「声調・声点」の二語の用法において、あるいは誤解を招きかねないところのあるのが気にかかる。声調面からの呉音系統論は、中国側（さらには朝鮮側）の事情が判然としていないのでなかなか困難である。今後の研究の動きを見守って行きたい。

右の二つのほか、三声説に立つものには、㊸沼本克明「平安時代における日常漢語のアクセント」（『国語国文』48―6、昭54・6）㊹高松政雄「呉音声調――親鸞の場合――」（『岐阜大学教育学部研究報告』〈人文科学〉26、昭53・2）、㊺同「『三声融通』『二声融通』――呉音声調の一研究――」（『国語国文』47―2、昭53・2）、㊻同「観智院本『世俗諺文』の声点」（『国語国文学』〈岐阜大学〉13、昭53・3）、㊼同「呉音の四声――補忘記にみる――」（㊹と同27、昭54・2）、㊽同「倶舎論者義声点攷」（『訓点語と訓点資料』63、昭54・4）、㊾崎村弘文「呉音声調の国語化と訓点資料――儀軌類を中心に――」（『語文研究』44・45、昭53・6）などがある。㊸は、『和名抄』の「俗云、此間云」などの付された漢語声調の検討で、三声説補強論でもあるが、それらの漢語を「日常漢語」と一括できるのかどうか（永山勇『国語意識史の研究』では「当世語・常用語・現代語」という）。㊹～㊽は、呉音声調の個々の書における具体相や変化の側面を分析考察するもの。後の㊼㊽なども含め、いわば個別論における高松の活躍が目立つ。㊾は「儀軌類」の声調を上・去声点出現度と年代との二面から検討する。今後においては、質的な面すなわちいかなる漢字に声点加点がなされているか、への考慮も必要とされよう。

さて、㊿望月郁子「観智院本『類聚名義抄』の和音注――法華経字集との関連において――」（『訓点語と訓点資料』63、昭54・4）は、緻密な調査と論証に裏付けられており、また『類聚名義抄』の研究に新しい視野を開きそうでもある。この論文の、三声説に間接的ながらかかわる部分を見ると、三声説の論拠の一つ、和音即呉音、図書寮本和音即観智院本和音、という見方に対し、少なくとも全面的には賛成していない。また、「〇上」のような声点加点形式に対する解釈も三声説（沼本克明「呉音の声調体系について」〈『国語学』107〉）とは異なる。なお、他方、呉音・和音同源説に(71)沼本克明「図書寮本類聚名義抄『真興音（和音）』論続貂」（『国語と国文学』55―10、昭53・10）のあることを紹介しておかねばならない。

三声説はきわめて魅力に富む。しかしながら、右の㊿への反論も含めて、それを確固としたものにするためには、なすべき基礎的作業なり研究なりが、なお残されているように思われる。三声説をめぐる活発な議論の望まれるところである。

声調関係では、ほかに、呉音資料を知るに有益な、(72)沼本克明「呉音読資料の検討――声点の加点法の相違と学統との関係について――」（『鎌倉時代語研究』1、昭53・3）があるが、声調以外の呉音漢音研究には次のようなものがある。(73)小倉肇「新訳華厳経音義私記の同音字注（下）――韻母・声調について――」（『弘前大学教育学部紀要』39、昭53・2）、(74)同「金光明最勝王経音義字音攷（I）（II）――資料篇（上）（中）」（同40・41、昭53・9、54・2）、(75)清水史「小川本新訳華厳経音義

私記音注攷――その資料的分析と整理(二)――」（『野州国文学』21・23、昭53・3、54・2）、㊻二戸麻砂彦「前田家本色葉字類抄音注攷（1）――同音字注の考察――」（『国語研究』42、昭54・3）。㊸㊺㊻はいずれも堅実な論文。漢字音の体系化が叫ばれていく久しいが、このような論文のつみ重ねが、逆説的に今求められているのかもしれない。㊼高松政雄「『呉音』の中の異形――真宗伝承音より――」（『国語国文学』〈岐阜大学〉13、昭53・3）、㊽同「『慣用音』の一考察――『茶チャ』について――」（『論集3　中世』、昭53・6）はそれぞれ「阿・水（ワ・ア・ス）・住（チュ）」・「茶（チャ）」の由来を詳細に考察するもの。その他、㊾夏井邦男「『醒睡笑』を通してみた漢音と呉音とについて」（『北海道教育大学紀要』1A29―1、昭53・9）、㊿木村秀次「『四書示蒙句解』における漢語――現在とよみを異にするもの――」（『中田論集』、昭54・2）、(81)湯沢質幸「漢音・唐音の一問題――灰韻字のuイ韻について――」（『国語国文』48―6、昭54・6）などがある。㊾㊿は、読みの確定や呉音漢音の認定に問題が残るようである。また、『法華経』音義研究に、(82)小川栄一「月瀬文庫蔵『字音仮名書法華経』の字音表記について」（『中田論集』、昭54・2）と(83)林史典「法華経音義における字音分類について」（同）がある。この内(83)は、分類の原理のみならず、日本漢字音の分析が過去においていかなるレベルで行われていたかを示唆している点で興味深く、今後の論の発展が期待される。なお、ここで、未見の論文であるが次の三つを紹介しておく。(84)馬淵和夫「『水言抄』に付せられた声点をめぐって」（『説話』6、昭53・5）、(85)三保忠夫「漢字音の促音化とその表示法――お茶の水図書館蔵光明真言土沙観信記による――」（『鎌倉時代語研究』2、昭54・3）(86)沼本克明「大般若経読誦音に於る漢音混入について」（同）。

次に唐音研究では、矢野準に、(87)「近世唐音のかな表記に関する一報告」（『静岡女子大学研究紀要』11、昭53・3）、(88)「戯作の唐音かな表記」『文献探究』2、昭53・3）(89)「戯作類における唐音表記」（『語文研究』44・45、昭53・6）がある。これらはこれまで比較的手薄だった近世唐音研究の基礎をなすものとなろう。

最後に、間接的ながら漢字音研究に役立つ論文をいくつか掲げておこう。今期は韻書研究に力作が見られた。ただし、訓点資料は割愛せざるをえない。(90)大友信一「『聚分韻略』と『海蔵略韻』」（『岡山大学法文学部学術紀要文学』38、昭53・1）、(91)同「韻書の系譜」（同39、昭53・12）、(92)安田章「韻字の書」（『国語国文』47―1、昭53・1）、(93)同「和漢聯句と韻書」（『論集3中世』、昭53・6）、(94)井野口孝「新撰字鏡『玉篇群』の反切用字」（『文学史研究』17・18、昭53・4）、(95)福永静哉「韻鏡開奩の『六対十二反切例』について」（『女子大国文』83、昭53・6）。

四　おわりに

今期における音韻の史的研究はここ数年来の傾向に沿い、上代語・清濁・漢字音あたりを中心として発展の度を加えている、といえよう。しかし、かつて山口佳紀が本欄（『国語学』97）で指摘した、「何を目標とし」「いかに描かれるべきかという、音韻史研究のいわば骨格とでも言うべき問題」はなお残されているといわねばならない。もちろん、さし迫った個々具体的な問題の解決も必要不可欠であるが、それとともにこのような目標や方法論をめぐる議論も今後活発になされることを望み本展望を終えたい。

――山形大学助教授――